

## 日本語とビルマ語の相互変換における問題点

—人物を指示する名詞周辺の現象—

Some Problems on Transforming between Japanese and Burmese:  
“Personal Referents” and their Relating Phenomena

岡野 賢二

Kenji Okano

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

### 要旨

日本語とビルマ語は特定の人物を指示する方法がたくさんある。Okell (1969) は彼の記述研究でそれらを “personal referents” (人物指示詞) と読んだ。この概念は日本語にも適法可能である。人物指示詞には人称代名詞, 人名, 親族名詞, 職業名などが含まれる。話者は状況に応じてその中から適切な名詞を選ばなければならない。さらに両言語は, 聞き手に対する話者の態度を示す敬称がある。殊に自動翻訳システム確立のために, 言語現象に応じたそれぞれの人物指示詞が持つ特徴を知り, 適切な形式を選ぶための基準や条件を明らかにする必要がある。本稿はビルマ語の人物指示詞の基本的な特徴を記述し, 理論的に正しい出力を得るためのアルゴリズムの構築に貢献することを目的とする。

Japanese and Burmese have a vast way to address a specific person. Okell (1969) calls them as “personal referents” in his Burmese description. This notion can be adapted to Japanese. Personal referents include personal pronouns, person’s names, kin terms, job titles and so on. A speaker must choose an appropriate noun from these, based on a given situation. In addition, the two languages share the honorifics, which are added to a person’s name to express the speaker’s attitude to the hearer. According to these linguistic phenomena, it is necessary to know features that each personal referent has and to clarify the criteria or conditions to choose an appropriate one, especially when establishing an automatic translation system. This paper aims to describe some basic features of Burmese personal referents to contribute construction of an algorithm to get the right output theoretically.



キーワード：ビルマ語，人物指示詞，敬称，パラレルコーパス

Keywords: Burmese, personal referent, honorific, parallel corpus

## はじめに

本稿は日本語からビルマ語訳文を自動的に生成，あるいはその逆の際に問題となる点，特にその中で人物指示名詞および敬称 (honorific) について記述する。そのためのデータとして主として TUFs Asian Language Parallel Corpus (以下 TALPCo) <sup>1</sup>を用いる。TALPCo とは日本語の文 1732 文 (本稿執筆時点) と，それをそれぞれビルマ語，マレー語，インドネシア語，および英語に翻訳した文からなるパラレルコーパスである。翻訳はある程度「機械的に」変換されている。また各言語のデータは完全ではないもの，おおよそトークナイズされている。

この日本語から各言語へ翻訳・変換する際，問題となることの一つが特定の人物を指示する語の選択基準である。日本語と対象言語とが必ずしも同じ選択基準を持っているわけではなく，単純に置き換えをすればよいというわけにはいかない。そこで本稿ではこの問題についてビルマ語と日本語との対照記述を行うことで，翻訳・変換を行う上で語彙選択ミスを減らすための可能性を探る。

本稿において Okell (1969) の “personal referent” にほぼ相当する語として「人物指示名詞」という語を用いる。人物指示名詞は名詞の下位分類であり，特定の人物を指し示す際に用いられる名詞の総称である。この中にいわゆる人称代名詞も含まれる。

ビルマ語のような言語では人称代名詞は人称や数だけで画一的に決まるものではなく，話者の性別によって語彙が異なったり，あるいは聴者との関係において語彙が選択されたりする。つまり一人称や二人称には複数の形式があり，その形式はそれぞれ異なる。適切な語彙が選択されないと文法的に不適格になったり，コミュニケーションに障害を引き起こしたりすることになる。例えば「わたし」は話者の性別にかかわらず用いられるが「あたし」は通常，女性しか用いない，といった事情に似ている。

親族名称は人称代名詞とは異なり，あらゆる人称の特定の人物を指示するのに使われる。ただビルマ語の語彙は日本語のそれよりも多く，またその使用原理も異なる部分がある。

人物を指示する表現として重要なものに敬称がある。ビルマ語の敬称は人名の前に付される要素で，日本語の「～さん」「～君」にほぼ相当すると言っているが，日本語よ

りも使い分けが若干細かい。また敬称の付け方が両言語で異なっているので、単純に置き換えればよいとはならない。

以下、本論を読み進める上での参考に、ビルマ語の文法構造を概観する。ビルマ語は述語末尾型 (predicate final) 言語で、主語や目的語など、述語以外の要素は述語に先行する。述語以外の要素の語順は比較的自由であり、文脈等から復元可能な場合は文内に明示されないこともある。述語には動詞述語と非動詞述語とがある。動詞述語は「動詞＋動詞文標識 (verb sentence marker: vs.)」という構造を取る。動詞文標識はそれが動詞文であることを示すとともに、法 (mood) をも示す機能を持つ。ビルマ語の法は大きく分けて直説法 (indicative) と命令法 (imperative) の二つがある。直説法における基本的な対立は現実 (realis) と非現実 (irrealis) であり、否定ではこれらは中和する。現実と非現実の区別は時制 (tense) ではない。

文の要素は基本的な構成素、例えば主語や目的語などは無標 (unmarked) で現れることが多い。ただし意味的に曖昧になる場合は格助詞 (後置詞) が現れる。

大まかな傾向として、主要部 (head) に先行する要素は限定的 (attributive) であり、後続する要素は関係表示的である、といえる。名詞の限定構造は修飾要素>被修飾要素の順に並ぶ。なお量化要素 (quantifier) や素性 (property) を表す名詞的要素は主要部の後ろに現れ、同格的構造 (adpositional structure) を取る。

音声表記については本論文末の「音声表記」を参照されたい。

## I. 人称代名詞

### 1. 人称代名詞の概要

ビルマ語の一人称および二人称代名詞は話者<sup>2</sup>の性別によって区別されるものと、性別によらないものがある。インド・ヨーロッパ系言語などに見られるような、指し示す対象の性別により三人称が区別されるという現象はない<sup>3</sup>。

表 1：ビルマ語口語の人称代名詞

	男性話者	女性話者	
一人称	ကျွန်တော် <i>tcǎnɔ̃</i>	ငါ <i>ŋá</i>	ကျွန်မ <i>tcǎnɔ̃</i>
二人称	ခင်ဗျား <i>kʰǎmyá</i>	မင်း <i>mín</i> နင် <i>nín</i>	ရှင် <i>cin</i> <sup>4</sup>
三人称	သူ <i>tù</i>		
不定人称	ဘယ်သူ <i>bětù~bǎtù</i>		

一人称、二人称は男性用語、女性用語の形式が正式なものと考えられており、丁寧な表現であるといえる<sup>5</sup>。一人称は場面を選ばないことが多いが、二人称についてはその出現頻度は高くない。上位者に対して *ခင်ဗျား kʰǎmyá* や *ရှင် cin* を使うことは極めてまれであろう。通常は名前を使うか、親族名詞、職業上の肩書きなどを使う。なおマンダレーを中心とする上ビルマにおいて一人称代名詞 *ကျွန်တော် tcǎnɔ̃* が女性によって広く使われることはよく知られている事実である。ただ標準方言としては上ビルマにおいても上記表の区別をしていると言っていいだろう。

話者の性別にかかわらず用いることのできる *ငါ ŋá*, *မင်း mín*, *နင် nín* は親しい間柄か下位の者との会話に限られる<sup>6</sup>。*ငါ ŋá* はシナ・チベット語族に広く見られる形であり、パガン時代の碑文（12-3 世紀）にも現れる由緒ある語であるが、現在では使用場面を選ぶ。これは二人称 *မင်း mín*, *နင် nín* にも言える。

三人称、不定人称「だれ」は話者、指示対象のいずれも性別を問わない。

複数は別個の形式を持つのではなく、上記の形式に連想複数接尾辞 (associate plural, APL) *-တို့ -tɔ̃* を付けることで派生される。不定人称に連想複数接尾辞は付かない。

なお文構造とは有機的な繋がりのない、丁寧さを表す発話末要素 *ခင်ဗျား kʰǎmyá~ဗျာ byà*, *ရှင် cin* は語形的に二人称代名詞と明らかに繋がりがあ。言うまでもなく、前者が男性用語、後者が女性用語である。

## 2. TALPCo における人称代名詞選択

TALPCo に現れる人称代名詞は一人称と二人称である。三人称と思われる語彙（彼、彼女、あの人など）は出現していない。

TALPCo ビルマ語は、日本語の文から置き換える際、一人称については下に示す2例を除いて全て男性用語 ကျွန်တော် *tcǎnǎ* を用いている。女性用語 ကျွန်မ *tcǎmá* を用いたものはなかった。ただし例外として以下の例があった（初頭の番号は TALPCo のもの、太字・ゴシック体は筆者による）。なお日本語にある「 $\square$ 」は実際には不可視の空白記号で、tokenization の区切り記号である。また以下に表記するビルマ語の区切りは筆者の言語学的解釈による分析ではなく、TALPCo における空白を区切りとした。そのため一部に一貫性を欠く部分があることをお断りしておく。

[3824] 皆さんが $\square$ 行くなら、 $\square$ わたしも $\square$ 行きます。

မင်းတို့ သွားရင် ငါလည်း သွားမယ်။

*mín-tó* *ɬwá-yìN* *ŋà-lé* *ɬwá-mè.*  
2-APL go-if 1-also go-VS.IRR

[3846] うちの $\square$ 犬は $\square$ 本当に $\square$ かわいいです。

ငါ့အိမ်ကခွေးလေးက တကယ့်ကို ချစ်ဖို့ ကောင်းတယ်။

*ŋá-?èiN-ká-k<sup>h</sup>wé-lé-ká* *dǎgégò* *tc<sup>h</sup>i?-p<sup>h</sup>ò* *káun-tè.*  
1.OBL-house-ABL-dog-DIM-NOM really love-for good-VS.RLS

[3824]では「皆さん」の訳語に二人称代名詞 မင်း(တို့) *mín(-tó)* を使ったため、その丁寧さの度合いに応じた *ci* *ŋá*が選択されたものと考えられる。また [3846] では訳者が「うち」が「わたし(の家)」よりも丁寧さの度合いが低いとみなしたのであろう。これは *ci* *ŋá*を選択すべき理由としては合理性があるとはいいいがたく、ကျွန်တော် *tcǎnǎ*を用いればよいケースと言える。

ただ [3824] の例は示唆的である。一人称代名詞と二人称代名詞が一文内に現れているのは TALPCo の中にわずか一例しかないので断定的に述べることはできないが、一人称代名詞と二人称代名詞の選択は連動している可能性がある。

次に二人称代名詞について見てみよう。日本語の二人称代名詞「あなた」にビルマ語はほぼ မင်း *mín* であり、わずか一例のみ နင် *nìn* が使われていた。

[2170] あなたの「お仕事は」何ですか。

မင်း: ဘာအလုပ် လုပ်သလဲ။

*mín* *bà-ʔǎlouʔ louʔ-tǎ-lé.*  
2 what-job work-VS.RLS-Q<sub>sp</sub>

[2234] あなたも「よく」働きますね。

မင်း: တော်တော် အလုပ်လုပ်တာပဲနော်။

*mín* *tòdò ʔǎlouʔ-louʔ-tà-pé-nò.*  
2 quite job-work-NC.RLS-FOC-Q<sub>tag</sub>

[3288] あなたは「あつちで」仕事を「して」ください。

နင် ဟိုဘက်မှာ အလုပ်လုပ်နေပါ။

*nín* *hò-pʰéʔ-hmà ʔǎlouʔ-louʔ-nè-pà.*  
2 that-side-LOC job-work-stay-PLT

[3289] その「カップは」あなたのです。

အဲဒီခွက်က မင်းတာပါ။

*ʔédi-kʰwéʔ-ká mín-hà-pà.*  
that-cup-NOM 2-FN-PLT

前節で述べたように、二人称代名詞には話者の性別により区別する語彙と、話者の性別に関わりなく用いられる語彙とがある。表に挙げたように *နင် nín* と *မင်း mín* はいずれも話者の性別により区別しない語彙である。4 例中 3 例は *မင်း mín* だが [3288] だけは *နင် nín* が選択されている。

両者の辞書記述 (注 6 参照) によれば、*နင် nín* は同年もしくは若い人に対する親密もしくは丁寧でない語彙であるのに対し、*မင်း mín* は対等な相手に対する親密な語彙もしくは上位から下位の者に対する語彙である。[3288] が他と状況的に異なるとすれば、[3288] では話者と聴者は同じ職場で働くもの同士であり、聴者は話者と同位かもしくは下位の者であることが推論される。それ以外の 3 例では職場が同じであるとか、どちらが上位であるかという情報は読み取れないだろう。[3288] のケースで特に *မင်း mín* が選ばれない理由は不明である。

上述のように日本語に三人称を指すと思われる語彙は見当たらないが、ビルマ語には

1 例ある。これはビルマ語の語法上の必要から現れるものである。動詞 သင် *tiv* 「学ぶ」は動作の方向が定まっておらず、項構造によって「学ぶ」「教わる」「教える」となる。[2925] のビルマ語を逐語的に訳すなら「彼 (= 弟) (の) ところ から教わったのだ」となる。

[2925] 弟は 〇 サッカーが 〇 上手なので、 〇 教えて 〇 もらいました。

ညီလေးက	ဘောလုံးကစား	တော်လို့	သူ့ဆီက	သင်ထားတာ။
<i>ni-lé-ka</i>	<i>bóloun-gǎzá</i>	<i>tò-lò</i>	<i>tú-s<sup>hi</sup>-ka</i>	<i>tì-t<sup>h</sup>á-tà.</i>
brother.y-DIM-NOM	ball-play	excellent-CNSQ	3.OBL-FN <sub>place</sub> -ABL	study-put.on-NC.RLS

ただこれは日本語の三人称をビルマ語に変換したケースではない。一般論として、日本語の三人称は指示対象の性別により語彙を選択しなければならないが、ビルマ語には選択肢が သူ *tù* 一つであるので、機械的に変換可能である。

不定人称について今回は取り上げない。日本語には「誰」「どなた」「どちら (さま)」など、聴者との関係においていくつかの語彙選択をする必要があるが、日本語からビルマ語へ変換する際には ဘယ်သူ *bètù~bǎtù* しか選択肢がない。

以上、日本語からビルマ語へ変換するケースでは、以下のように処理している。

(1) TALPCo における日本語 > ビルマ語変換：人称代名詞

一人称	わたし	>	ကျွန်တော် <i>tcǎnò</i>	※男性用語
	うち	>	ငါ <i>ŋà</i>	※親しい、もしくは下位の者
二人称	あなた	>	မင်း <i>mín</i> / နင် <i>nín</i>	※親しい、もしくは下位の者
三人称	?	>	?သူ <i>tù</i>	※指示対象の性別不問

日本語の一人称「わたし」は話者の性別についての指定がないが、ビルマ語に変換する場合、親しい間柄か下位の者との会話でない限りは話者の性別指定が必要である。「うち」を ငါ *ŋà* とするのは適切とは言えない。

二人称は前述の通り、通り一遍に変換することは困難である。日本語の「あなた」が上位者に対して使いにくいという事情があるため、မင်း *mín* または နင် *nín* に変換することはそれほど悪い解決策ではないだろう。むしろ聴者が話者より上位者である、あるいは

は親しい間柄ではないケースで、日本語がどのような語彙選択をするのか、についての研究が必要で、それを基に外国語への変換を論じる必要がある。

三人称は日本語の「彼」「彼女」をビルマ語の သူ တူ *tù* がほぼ包括していると考えられるので、特に問題はない。

### 3. ビルマ語から日本語への変換：人称代名詞

ビルマ語から日本語へ変換する際、人称代名詞で問題となるのは三人称である。一人称、二人称はほぼ問題ないだろう。

前述の通り、ビルマ語の三人称は基本的に သူ တူ *tù* だけで、指示対象の性別による区別がない。そのため သူ တူ *tù* の日本語として「彼」「彼女」を選択するとき、指示対象の性別がメタ情報としてどこかに定められている必要がある。

三人称代名詞 သူ တူ *tù* の性別について、様々な状況から判別できる場合がある。例えば身分などを表す語彙の一部は、性別により区別があるものがある。この区別は大まかに行って二種類のパターンによって形式的に明示される。ひとつは男性形が基本形でそれに女性・雌性を現わす接尾辞-မ *-má* が後接して女性形が派生されるものであり、もうひとつは名詞に男性の人を表す拘束形態素の主要部名詞-သား *-tá* が後接して男性形が、女性の人を表す拘束形態素の主要部名詞-သူ *-tù* が後接して女性形が派生されるものである<sup>7</sup>。なお女性の人を表す拘束形態素-သူ *-tù* は三人称代名詞 သူ တူ *tù* と同形であるが、後者は独立形態素である。

(2)	ဆရာ	vs.	ဆရာမ
	<i>s<sup>h</sup>āyà</i>		<i>s<sup>h</sup>āyà<sup>má</sup></i>
	male.teacher		female.teacher
	男性教師		女性教師
(3)	ကျောင်းသား	vs.	ကျောင်းသူ
	<i>t<sup>c</sup>áun<sup>tá</sup></i>		<i>t<sup>c</sup>áun<sup>tù</sup></i>
	male.student		female.student
	男子学生/生徒/児童		女子学生/生徒/児童 <sup>8</sup>

これらの名詞が三人称代名詞 သူ တူ *tù* のプロパティを決めている場合、သူ တူ *tù* の訳語の性



別は一義的に決まる。しかし次の c のように文内の要素から決まらない場合もある。

- (4) a. သူ ဆရာပါ။ 彼/\*彼女は先生だ。  
            $\dot{t}u$  *s<sup>h</sup>äyà-pà.*  
           3 male.teacher-PLT
- b. သူ ဆရာမပါ။ 彼女/\*彼は先生だ。  
            $\dot{t}u$  *s<sup>h</sup>äyámâ-pà.*  
           3 female.teacher-PLT
- c. သူ ကုမ္ပဏီဝန်ထမ်းပါ။ 彼女/彼は会社員だ。  
            $\dot{t}u$  *kòunpāni-wùndán-pà.*  
           3 company-staff-PLT

上記 a. b. は指定文の述語に性別情報を含む属性の語が現れているため、三人称代名詞 သူ  $\dot{t}u$  の訳語を決定できるが、c. のように性別情報を含まない属性の語が指定文の述語である場合や、それ以外の構文の場合はそのような情報を論理的帰結として獲得することはできない。三人称代名詞 သူ  $\dot{t}u$  の性別情報は語の意味論的な素性としてではなく、発話の状況などの中で定めておく必要がある。

## II. 親族名詞

親族名詞 (kin terms) もまた、特定の人物を指し示すために用いられる。ただ人称代名詞とは異なり、不定人称を除くいずれの人称でも用いられる。これは日本語においてもビルマ語においても同様である。

### 1. 親族名詞の概要

特定の人物を指示する語として、ビルマ語では親族名詞が最もよく使われるものと言っているだろう。実際の血縁関係の有無に関わらず使用される。また性別は指示対象の性別による。なお弟、妹のみ、誰にとっての弟/妹か、によって語彙が区別される。

表 2：人称名詞として用いられる主な親族名詞

	男性	女性
祖父母	အဘိုး ṽăp <sup>h</sup> ó 「お祖父さん」	အဘွား ṽăp <sup>h</sup> wá 「お祖母さん」
父母	အဖေ ṽăp <sup>h</sup> è 「お父さん」	အမေ ṽămè 「お母さん」
伯父伯母	ဘကြီး bádzí 「伯父さん」	ကြီးဒေါ် dzídò 「伯母さん」
叔父叔母	ဦးလေး ṽúlé 「叔父さん」	အဒေါ် ṽădò 「叔母さん」
小父小母	အန်ကယ် ṽánkè 「小父さん」	အန်တီ ṽántì 「小母さん」
兄弟	အစ်ကို ṽăkò 「お兄さん」	အစ်မ ṽămá 「お姉さん」
弟妹 (1)	ညီ ṽí 「弟」	နှမ hnămá 「妹」
	မောင် màun 「弟」	ညီမ ṽímá~ṽămá 「妹」
息子・娘	သား ṽá 「息子」	သမီး ṽămí 「娘」

上記の表に挙げたのはあくまでよく用いられるということであり、またこの表に挙げられているもの以外にも親族名詞はある。ただヤンゴンなどの都会ではよく用いられる親族名詞の数は相対的に減ってきていてより単純化しているようだ。特に ဘကြီး bádzí 「伯父さん」、ကြီးဒေါ် dzídò 「伯母さん」は筆者の体験ではほとんど聞かれないという印象だ。血縁関係のない相手との会話でこの二つが使われることはほぼないといっていいだろう。血縁関係がない場合、ဦးလေး ṽúlé 「叔父さん」 အဒေါ် ṽădò 「叔母さん」を使用するが、近年では英語起源の အန်ကယ် ṽánkè 「小父さん」 (< uncle) や အန်တီ ṽántì 「小母さん」 (< aunty? auntie) を用いることが相対的に増えているようだ<sup>9</sup>。

なおこれらの多くは疊語形式も持っている。少し幼稚っぽい表現であったり (e.g. ဘိုးဘိုး p<sup>h</sup>óp<sup>h</sup>ó 「おじいちゃん」、ဘွားဘွား p<sup>h</sup>wá p<sup>h</sup>wá 「おばあちゃん」、ဖေဖေ p<sup>h</sup>èp<sup>h</sup>è 「パパ」、မေမေ mèmè 「ママ」、ဦးဦး ṽúṽú 「おじちゃん」、ဒေါ်ဒေါ် dò dò 「おばちゃん」 etc.)、かなり親密度の高い表現であったり (e.g. ကိုကို kòkò 「お兄ちゃん」、恋人関係を連想させる)

する。

ビルマ語が日本語と異なるのは、ビルマ語では基準となる人物よりも年下の親族名詞も address word として用いることができる点である。以下は、筆者が実際に遭遇した例である。

- (5) ညီလေး            ဒီဘက်ကို            လာ။  
*ni-lé                di-p<sup>h</sup>εʔ-kò            là-Ø.*  
 brother.y-DIM    this-side-ALL    come-VS.IMP  
 君，こっちへ来なさい。(警官が違反をした少年を呼びつけたシーン)

- (6) ဆရာ                သမီး                လာခဲ့ရမလားရှင်  
*s<sup>h</sup>āyà                ʔǎmí                là-k<sup>h</sup>ε-yá-mǎ-lá-εiv.*  
 male.teacher    daughter            come-AUX-AUX<sub>inev</sub>-VS.IRR-Qpol-PLT  
 先生，私女，そちらにうかがった方がいいでしょうか？(SNS メッセージ)

鈴木 (2017) はビルマ人が実際に一人称をどのような語彙を用いて指示しているか、を大学教員、大学生を対象としてアンケートをとって実証的に示した。

表 3：学校での学生の相手別 1 人称 (鈴木 2017:18 より・改変)

	後輩に	同学年に	先輩に	先生に
女子学生	အစ်မ ʔǎmá	ငါ့ ဂှဲ	ညီမ nimá	သမီး ʔǎmí
男子学生	ငါ့ ဂှဲ		ကျွန်တော် tεǎnò	

男子学生の場合、聴者が同学年以下か、同学年より年上か、という二分割であり、しかも親族名詞は用いず、人称代名詞を用いる傾向が強い。一方、女子学生の場合、聴者との関係により、4 つに細かく分けて使っている。同学年以外は親族名詞を使う。

これはあくまで強い傾向であって、このパターンに当てはまらないケースもあるわけだが、適切な語彙選択に年齢や地位の上位下位、指示対象との親疎、性別の確定が重要であることをこの結果はよく示していると言える。

親族名詞のなかで最も問題となるのは「弟」である。ビルマ語は ညီ *ni* 「男性にとっ

ての弟」と မောင် *màun* 「女性にとっての弟」と、語彙が異なる。「妹」も本来的には異なるのだが、現代では ရှေ့ *hnāmá* 「男性にとっての妹」の使用がかなり減り、その代わりに ညီမ *jimá~jāmá* 「女性にとっての妹」が男性にとっての妹をもカバーするようになってきている。つまり ရှေ့ *hnāmá* が衰退し、ညီမ *jimá~jāmá* だけが使われる<sup>10</sup>。

## 2. TALPCo における親族名詞

TALPCo には親族名詞があまり出現していない。日本語で検索をしたところ、表 4 のような結果であった。いずれも属性を現す名詞としての用法であり、人物指示名詞ではなかった。

表 4 : TALPCo に現れる親族名詞

親族名詞	出現数	例文番号
おじいさん	1	3277
おばあさん	1	3278
父	11	
父	8	1178, 2042, 2086, 2088, 2097, 3137, 3454, 3545
お父さん	3	1459, 1460, 3898
母	17	
母	16	1935, 1967, 2104, 2744, 3014, 3078, 3104, 3263, 3322, 3374, 3415, 3424, 3441, 3654, 3855, 3859
お母さん	1	3267
おじさん	1	3275
おばさん	2	3276, 3845
兄	4	
兄	3	2158, 3319, 3893
お兄さん	1	3266
姉	1	
姉	0	
お姉さん	1	3261
弟	9	
弟	8	1547, 2030, 2093, 2925, 3221, 3557, 3841, 3892
弟さん	1	3270
妹	14	
妹	13	1811, 2079, 2097, 2099, 2873, 3010, 3226, 3563, 3687,

		3691, 3733, 3859, 3899
妹さん	1	3269
息子	0	
娘	0	

例を詳しく観察すると、日本語のパターンは2つある。一つ目のパターンは話し手の血縁者であるかどうかに関わらず「～さん」を用いるもの。「おばさん」が該当する。

[3276] 小林さんの□おばさんは□東京に□住んで□います。

မစ္စတာခိုဘယာရှိရဲ့ အဒေါ်က တိုကျိုမှာ နေတယ်။

*miʔsātà-kʰòbàyàcǐ-yé ʔādò-ka tòtçò-hmà nè-tè.*

Mr.-NAME-GEN aunt-NOM name-LOC stay-VS.RLS

[3845] わたしの□おばさんは□花屋で□働いて□います。

ကျွန်တော်အဒေါ်က ပန်းဆိုင်မှာ အလုပ်လုပ်နေတယ်။

*tçǎnò-ʔādò-ka pánzàin-hmà ʔəlouʔ-louʔ-nè-tè.*

1MS.OBL-aunt-NOM flower.shop-LOC job-work-stay-VS.RLS

ペアとなる例はこの1例のみであるので確言はできない。また「おじいさん [3277]」「おばあさん [3278]」「おじさん [3275]」はそれぞれ1例ずつしかないので、何とも言えない。

[3275] あの□八百屋の□おじさんは□いつも□元気です。

အဲ့ဒီဟင်းသီးဟင်းရွက်ဆိုင်ကဦးလေးကြီးက အမြဲတမ်း တက်ကြွနေတာပဲ။

*ʔédi-hínʔíhinyweʔsʰàin-ka-ʔúlé-tçǐ-ka ʔǎmyédán tçʔtçwá-nè-tè.*

that.ANPH-vegetable.store-ABL-uncle-AUG-NOM always active-stay-VS.RLS

[3277] わたしは□おじいさんに□道を□教えて□あげました。

ကျွန်တော် အဘိုးကို လမ်းညွှန်ပေးလိုက်တယ်။

*tçǎnò ʔǎpʰó-kò lánhɲùn-pé-laiʔ-tè.*

1.MS grandfather-ACC give.direction-give-AUX-VS.RLS

[3278] 林さんの「おばあさん」は「眼鏡を」かけて「います」。

မစ္စတာယာယိရဲ, အဘွားက မျက်မှန်တပ်ထားတယ်။

*miʔsàtā-háyáçí-yé ʔǎp<sup>h</sup>wá-ká myeʔhmàn-taʔ-t<sup>h</sup>á-tè.*

Mr.-NAME-GEN grandmother-NOM spectacles-wear-put.on-VS.RLS

二つ目のパターンは、話し手の血縁者には何も付けず、話し手以外の血縁者、あるいはただの他人の場合に「(お)～さん」とするものである。「父」「母」「兄」「弟」「妹」がそれにあたる。

[1178] 父は「先生」です。

အဖေက ကျောင်းဆရာပါ။

*ʔǎp<sup>h</sup>è-ká tɕ<sup>h</sup>áun-s<sup>h</sup>áyà-pà.*

father-NOM school-teacher-PLT

[1460] 山田さんは、「お父さん」が「医者」です。

မစ္စတာယာမာဒါရဲ, အဖေက ဆရာဝန်ပါ။

*miʔsàtā-yàmàdà-yé ʔǎp<sup>h</sup>è-ká s<sup>h</sup>áyàwùn-pà.*

Mr.-NAME-GEN father-NOM medical.doctor-PLT

[3014] 母は「料理が」好きです。

အမေက ဟင်းချက် ဝါသနာပါတယ်။

*ʔǎmè-ká híntɕ<sup>h</sup>é? wàʔǎnà-pà-tè.*

mother-NOM cooking hobby-include-VS.RLS

[3267] 山田さんの「お母さん」は「料理が」とても「上手」です。

မစ္စတာယာမာဒါရဲ, အမေက ဟင်းချက် အရမ်း တော်တယ်။

*miʔsàtā-yàmàdà-yé ʔǎmè-ká híntɕ<sup>h</sup>é? ʔǎyáN tò-tè.*

Mr.-NAME-GEN mother-NOM cooking profusely excellent-VS.RLS

[3319] 来年から「兄」は「銀行に」勤めます。

ကျွန်တော့်အစ်ကို လာမယ့်နှစ်က စပြီး ဘဏ်မှာ အလုပ်ဝင်မယ်။

*tɕǎnṵ-ʔǎkò là-mé-nhiʔ-ká sá-pí bàN-hmà ʔǎlouʔ-win-mè.*

1MS.OBL-brother.e come-AT.IRR-year-ABL start-SEQ bank-LOC job-enter-VS.IRR

[3266] 来週「イさんの」お兄さんが「日本へ」遊びに「来」ます。

နောက်အပတ် မစ္စတာလီရဲ့ အစ်ကို ဂျပန်ကို အလည်လာမယ်။  
*nau?-?āpa? mi?sātà-li-yé ?ākò dzāpàn-ko ?ālè-là-mé.*  
 next-week Mr.-NAME-GEN brother.e NAME-ALL visit-come-VS.IRR

[2925] 弟は「サッカーが」上手なので、「教えて」もらいました。

ညီလေးက ဘောလုံးကစား တော်လို့ သူ့ဆီက သင်ထားတာ။  
*ni-lé-kā bəloun-gāzā tō-lō tū-s<sup>h</sup>-kā tì-t<sup>h</sup>á-tà.*  
 brother.y-DIM-NOM ball-play excellent-CNSQ 3.OBL-FN<sub>place</sub>-ABL study-put.on-NC.RLS

[3270] 小林さんの「弟さん」は「サッカーを」して「います」。

မစ္စတာဟယရှိရဲ့ ညီလေးက ဘောလုံး ကစားနေတယ်။  
*mi?sātà-hāyáçí-yé ni-lé-kā bəloun gāzā-nè-té.*  
 Mr.-NAME-GEN brother.y-DIM-NOM ball play-stay-VS.RLS

[2873] わたしの「妹」は「背が」低くて、「髪が」長いです。

ကျွန်တော်<sup>1</sup> ညီမက အရပ် ပိုပြီး ဆံပင် ရှည်တယ်။  
*tçānô-nimā-kā ?āya? pū-pí zābin è-té.*  
 1MS.OBL-sister.y-NOM height short-SEQ hair long-VS.RLS

[3269] 山田さんの「妹さん」は「背が」低くて、「かわいい」です。

မစ္စတာယာမာဒါရဲ့ ညီမလေးက အရပ်က ပိုပိုလေးနဲ့ ချစ်စရာ  
*mi?sātà-yamàdà-yé nimā-lé-kā ?āya? pūbūlé-né tç<sup>h</sup>i?-sāyà*  
 Mr.-NAME-GEN sister.y-DIM-NOM height short-COM love-necessity  
 ကောင်းတယ်။  
*káun-té.*  
 good-VS.RLS

「姉」については、以下の「お姉さん」の例しかない。しかしこれらと同じと考えて差し支えないだろう。

[3261] 木村さんの「お姉さんは」とても「きれいな」人です。

မိလ္လာအိမ္မရရဲ, အစ်မက အရမ်း ချောတဲ့ မိန်းကလေး။  
*miṛsātà-k<sup>h</sup>iṁmûrâ-yé ṛāmâ-kâ ṛāyán tśó-té méingǎlé.*  
 Mr.-NAME-GEN elder.sister-NOM profusely handsome-AT.RLS girl

日本語からビルマ語へ変換する際、これらの違いはあまり意味をなさない。自分より下位の者をより親しみを込めて呼ぶ場合に指小辞-လေး *-lé* が現れることが多いという傾向はみられる。しかし日本語の「(お)～さん」の使用とは連動しない。

### 3. ビルマ語から日本語への変換：親族名詞

姻戚関係の分類、つまり語彙はビルマ語の方が日本語より細かい。属性の数としては日本語の方が少ないため、ビルマ語を日本語に変換する際、複数ある属性が日本語で中和する。よって日本語からビルマ語へ変換するよりも属性という点では問題が生じにくい。

しかし上述の日本語で同じ姻戚関係を表す語であっても、身内かどうかによって裸の名詞を使うか、それとも「(お)～さん」形を使うか、という区別があるため、その差を表す素性を与えておかねばならない。すなわち（身内かそうでないかという違いに連動しているという観察が正しければ）「誰にとっての」という情報が日本語への変換では必須になってくることになる。特に「弟さん」や「妹さん」は身内に使うのは容認度がかなり下がると思われる（e.g. 「私の弟さんは作家が上手なので…」）。

これに対し「お父さん」「お母さん」「お兄さん」「お姉さん」は身内に使っても（若干不自然なケースはあるものの）さほど大きな違和感を与えることはないだろう。

もう一つの問題として、親族名詞が *address word* として用いられるケースについて述べておこう。日本語において特定の人物を指示するのに使う親族名詞は基本的に年上の関係を表す語彙で、かつ「(お)～さん」形に限定されると考えられる。しかしビルマ語では年下の関係を表す語彙も *address word* として用いられる（例文 (5), (6), 表 3 を参照）が、日本語は年下の関係を表す語彙は属性を表し、*address word* としては用いられない。そのため年下の関係を表す親族名詞、すなわち ညီ *ni* 「(男性にとっての) 弟」、မောင် *màun* 「(女性にとっての) 弟」、နွှဲ *hnāmá* 「(男性にとっての) 妹」、ညီမ *ni má~námá* 「妹」、သား *tá* 「息子」、သမီး *tāmí* 「娘」について、*address word* かどうかの指定が必要



になる。そして address word であった場合、年下の関係を表すこれらの親族名詞は一人称か二人称かという情報も必要である。

以上をまとめると、次のような訳語選択フローチャートが考えられるだろう。年下の関係および年上の関係の一つずつ例示する。なお「A/B」は A と B とのどちらも選択可能であることを、「(A)」は随意的要素であることを示す。

(7) ビルマ語親族名詞の日本語訳語選択フローチャート (案)

a. ညိးၵိး *ni* 「(男にとっての) 弟」

i-1 address word か? [yes→ii-1, no→ii-2]

ii-1 一人称か? [yes→「わたし」、no→「あなた/君」]

ii-2 身内か? [yes→「弟」、no→「弟さん」]

b. အဝ်ၵိး *lakò* 「兄」

i-1 address word か? [yes→ii-1, no→ii-2]

ii-1 一人称か? [yes→「わたし/お兄さん」、no→「あなた/お兄さん」]

ii-2 身内か? [yes→「兄(さん)/お兄さん」、no→「(お)兄さん」]

အဝ်ၵိး *lakò* 「兄」の場合、極端に言えば「お兄さん」のみを唯一の訳語の選択肢としていい、とも言える。一方、ညိးၵိး *ni* 「(男にとっての) 弟」はここで設定したプロパティの全てのケースでそれぞれ別の訳語を選択しなければならない。

### III. 敬称 Honorifics

#### 1. 敬称の概説

ビルマ語の敬称は、それが付される人物の性別および年齢に応じて使い分けされる。最も一般的な敬称は以下に示すとおりである。

表 5：ビルマ語の敬称 (接頭辞)

	男性	女性
年上	ဦး <i>ʔú</i>	ဒေါ် <i>dò</i>
同世代	ကို <i>kò</i>	မ <i>maʔ</i>
年下	မောင် <i>màun</i>	

男性は同世代と年下とを分けて 3 分割とするが、女性は同世代と年下との区別をせず、2 分割となる。

語形を見れば、これが親族名詞を起源としていることは明らかであろう。年上・男性は ဦး (လေး) *ʔú* (*lé*) 「叔父」、年上・女性は (အ) ဒေါ် (*ʔǎ*) *dò* 「叔母」、同世代・男性は (အစ်) ကို (*ʔǎ*) *kò* 「兄」、同世代～年下・女性は (အစ်) အ (*ʔǎ*) *má* 「姉」、年下・男性は မောင် *màun* 「女性にとっての弟」である。

日本語と異なるのは、自ら名前を名乗るときにもこの敬称を用いるのが普通だと言うことだ。

(8) ကျွန်တော့်နာမည် ဦးဖြိုးဝေလို့ ခေါ်ပါတယ်။

*tɕǎnṵ-nà mè ʔú-phyó wè-ló kʰṵ-pà-ʔè*  
 1.MS.OBL-name HON-NAME-QUOT call-PLT-VS.RLS

私の名前はウー・ピョーウェイと言います。[作例]

外国人の場合、ビルマ語の敬称を使うケースもないではないが、通常は英語起源の မစ္စတာ *miʔsàtá* “Mr.”, မစ္စ မိʔs (*ǎ*) “Miss” を使う。一般的に外国人の名前はなじみがないため、あえてこれらを使うことで外国人名であることを明示的にしていると考えられる。以下、補足として SEALang Library<sup>12</sup> のビルマ語 Bitext Corpus で得られた英語起源の敬称の例を挙げる。

(9) မစ္စတာ အိုဘားမားသည် အမေရိကန်နိုင်ငံ အီလီနွိုက်ပြည်နယ် အထက်လွှတ်တော်အမတ်

*miʔsàtá-ʔòbámá-ʔì ʔámèríkàn-nàingàn ʔilínwàíʔ-pyìnè ʔátʰeʔhluʔtṵ-ʔámaʔ*  
 Mr.-NAME-SUBJ NAME-country NAME-state upper.chamber-representative

တဦး ဖြစ်ပြီး မစ္စ ဟီလာရီ ကလင်တန်သည် နယူးယောက်ပြည်နယ်

*tă-ʔú pʰyiʔ-pí miʔsă-hilàri kălintàn-ti năyúyauʔ-pyiné*  
 one-CLF COP-SEQ Miss-NAME-SUBJ NAME-state

အထက်လွှတ်တော်အမတ် တဦး ဖြစ်သည်။

*ʔătʰεʔhluʔtə-ʔămaʔ tă-ʔú pʰyiʔ-ti*  
 upper.chamber-representative one-CLF COP-VS.RLS

“Mr. Obama is the senator from the us state of Illinois, and Mrs. Hilary Clinton is the senator from New York State.”

(10) မစ္စစ်၊ ‘ဒေါ်ကဲ့သို့သော အိမ်ထောင်ရှင်အမျိုးသမီးများကို တပ်ခေါ် သောဂုဏ်ဘွဲ့

*miʔsiʔ də-kəʔtə-tʃ ʔèindàuncin-ʔămyóʔtămi-myá-kò taʔ-kʰə-tʃ gòunbwé*  
 Mrs.-Daw-as-at married.person-woman-PL-ACC affix-call-AT.RLS honofiric

Mrs., a title for a woman who is married; an abbreviation for the word Mistress

(11) မိစ် ဂျီဒီ ဝီလျမ်စ် “Ms. Jodi Wiliams”

*ʔmis-dzòdì wilyàm (s)*  
 Ms.-NAME

မစ္စ *miʔs (ă)* “Miss”はこの例でもわかる通り，Mrs.としても用いられる。SEALang Library の Bitext には外国人に Miss を使った例はない。မစ္စ *miʔs (ă)* はその語源に関わらず，いずれも Mrs.である。これは英語における Miss の使用頻度の減少という背景があるかもしれない。しかし Ms.も (11) の 1 例があるのみである。

例 (10) に現れる မစ္စစ် や (11) に現れる မိစ် は筆者の個人的な印象からすれば，ほとんど見かけることなく，ビルマ語に借用されたとは言い難い状況である。とくに後者はインターネットで検索してもあまり敬称として用いられる例は多くは見つからない。

SEALang Library でもそれぞれ一例のみで，しかも前者は敬称そのものとして用いられている例ではない<sup>13</sup>。

## 2. TALPCo における敬称

TALPCo に現れる人名はコーパスとしての性格上，東アジアの外国人（「イさん」）をのぞいて日本人であり，非ミャンマー人であることから，全て မစ္စတာ *miʔsătà* が用いら

れている。これは一人称がほぼ全て男性用語 ကျွန်တော် *tcǎnò* と訳されたことと酷似している。なお次に挙げる例はいわゆる「誤訳」である。

[3268] 林さんのご主人は病院で働いています。

မစ္စတာဟယရှိရဲ့ အမျိုးသားက ဆေးရုံမှာ အလုပ်လုပ်နေတယ်။  
*miʔsǎtà-háyácí-yé ʔǎmyóʔá-ká s<sup>h</sup>éyòun-hmà ʔǎlouʔ-louʔ-nè-tè.*  
 Mr.-NAME-GEN husband-NOM hospital-LOC job-work-stay-VS.RLS

発話の状況から「林さん」は女性であることが強く含意される<sup>14</sup>が、機械的に「[人名]さん」を မစ္စတာ *miʔsǎtà* としたことから生じたものであろう。状況から名詞素性をどのように抽出するか、が課題となる。

### 3. ビルマ語から日本語への変換：敬称

ビルマ語から日本語へ変換する場合に敬称をどうするのか、は単純ではない。1節で述べたように、ビルマ語では話者自身を含む「身内」にも敬称をつけることは全く自然だからである。ビルマ語文にある敬称をすべて「～さん」と訳すと、奇妙な日本語文が産出される可能性がある。

(12) ကျွန်တော့်နာမည် ဦးဖြိုးဝေလို့ ခေါ်ပါတယ်။  
*tcǎnò-nàmə ʔú-phyówè-ló k<sup>h</sup>ò-pà-tè*  
 I.MS.OBL-name HON-NAME-QUOT call-PLT-VS.RLS (= (8))  
 私の名前はピョーウェイ!/ピョーウェイさんと言います。

ビルマ語から日本語へ変換する場合に敬称をどうするのか、は単純ではない。1節で述べたように、ビルマ語では話者自身を含む「身内」にも敬称をつけることは全く自然だからである。ビルマ語文にある敬称をすべて「～さん」と訳すと、奇妙な日本語文が産出される可能性がある。敬称の付いている特定の人物が身内であるかどうか、という状況についての素性をどこかに指定しておく必要がある。

#### IV. まとめ

以上、人称代名詞、親族名詞、敬称の三つについて、日本語とビルマ語の相互変換にかかるアルゴリズムを考える上で基礎となるであろう、ビルマ語の言語事実の記述と若干の提案を試みた。その中で重要と思われる一つが、話者、聴者に内在するであろう素性である。それはそれぞれの言語で、語彙に既に指定されているものもあれば、そうでないものもある。それはそれぞれの言語で、一見して **equivalent** と思われる語彙であっても、その言語で任意に決まっている意味素性が異なっているからである。このような素性そのものの有無が異なっていれば、それを変換する際にそこを何らかの手段で指定しなければならない、ということに他ならない。

といっても意味素性の全てが変換の結果に影響を与えるわけではない。その意味で、いわゆる意味論的な研究とは少し趣旨を異にする。

TALPCo では二言語間での相互変換だけではなく、他のアジア諸語とのパラレルコーパスも持っている。どのような意味素性が必要か、状況設定が必要か、などはそれぞれの所与の二言語間において検討されなければならない。ある言語で記述されている意味素性は、もう一方の言語では素性として設定されていない、ということはこのような対照的な研究によってのみ抽出可能である。WordNet との連携も有効な手立てを与えるであろう。

また状況設定についても、現状の TALPCo のデータだけでは不十分であることも本稿における検討の過程で明らかになってきた。状況設定を網羅し、それを十分に反映する例文を追加していく必要がある。

## 略号等

本稿のグロスは基本的に Leipzig Glossing Rules (<https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf>) に従っているが、それに含まれない略号は以下の通り。

- AMPH: anaphora 照応  
 APL: associate plural 連想複数接尾辞  
 AT.IRR: attributive clause marker, irrealis mood 限定節標識, 叙想法  
 AT.RLS: attributive clause marker, realis mood 限定節標識法, 叙実法  
 AUX: auxiliary verb 助動詞  
 AUX<sub>inev</sub>: auxiliary verb, inevitable 助動詞《不可避, 当為》  
 CNSQL: consequential dependent clause marker 結果を表す従属節標識  
 FN: formative noun 形式名詞  
 FN<sub>place</sub>: formative noun, place 場所化する形式名詞  
 FOC: focus marker 焦点標識  
 FS: female speaker 女性用語  
 MS: male speaker 男性用語  
 NC.IRR: nominalized clause marker, irrealis mood 名詞化節標識, 叙想法  
 OBL: oblique form 斜格形式  
 Q<sub>pol</sub>: sentence final marker, special question 疑問の終助詞, 特殊疑問  
 Q<sub>sp</sub>: sentence final marker, special question 疑問の終助詞, 特殊疑問  
 Q<sub>tag</sub>: sentence final marker, polar question 疑問の終助詞, 極性疑問  
 SEQ: sequential dependent clause marker 継起を表す従属節標識  
 VS.IRR: verb sentence marker, irrealis mood 動詞文標識, 叙想法  
 VS.RLS: verb sentence marker, realis mood 動詞文標識, 叙実法

## 音声表記

本論文で使用した音声表記は以下の通り。

頭子音	阻害音	$p^h, p-, b-: t^h, t-, d-, tɕ-, tɕ^h, dz-: k^h, k-, d-: s^h, s-, z-$
	共鳴音	$hm-, m-: hn-, n-: hp-, p-: hŋ-, ŋ-: hl-, l-: ɕ-, y-: hw-, w-$
	その他	$ʔ-: h-: r-: f-$
介子音		$-y-: -w-$
母音	単母音	$-a, -i, -u, -e, -ɛ, -ɔ, -o: -aŋ, -iŋ, -uŋ: -aʔ, -iʔ, -uʔ, -ɛʔ$
	二重母音	$-aiŋ, -aun, -eiŋ, -oun: -aiʔ, -auʔ, -eiʔ, -ouʔ$
声調		$˨[22 (3)]: ˨˨[44 (3)]: ˨˨[41]$
軽音節母音		$-ǎ$

※軽音節以外の音節は全て声調を持つ。声門閉鎖音で終わる音節は、ビルマ語本来語の場合は常に下降調<sup>˥</sup>[41] となるため、この表記は省略してある。外来語は低平調<sup>˩</sup>[22 (3)] となる場合があり、その場合は声調表記を行う。軽音節は特定の調値を持たない無声調の音節であり、母音も中和して全て-*a*となる。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 17H02331, 18H05219, 18H00686 および国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業 (1594012) の助成を受けたものです。

注

- <sup>1</sup> <https://github.com/matbahasa/TALPCo>
- <sup>2</sup> 会話ばかりでなく、書き言葉においても用いられることからすれば「話者/筆者」「話し手/書き手」「聴者/読者」「聞き手/読み手」とするか、「発信者」「受信者」のようにすべきかも知れない。ただ本稿では発話される口語を主たる対象とし、書き言葉はそれに準ずるもの、という位置づけであることから、本稿では特に事情がない限り「話者」「聴者」に統一する。
- <sup>3</sup> 文章語として女性のみを指示する三人称代名詞 သူမ *nūmā* があるが、会話では用いられない。主として英語などからの翻訳に見られる。မ *ma mā* は女性/雌性を表す接尾辞で、翻訳のために人工的に作られた語ではないかと思われる。
- <sup>4</sup> この他に ညည်း *ni* があるが、これは ရှင် *ein* と異なり、かなり親しい間柄でしか使わない。TALPCo には出現しない。
- <sup>5</sup> 一人称代名詞文章語として女性のみを指示する三人称代名詞 ကျွန်တော် *teānò* および ကျွန်မ *teāmā* には発音に従った異綴り ကျနော် *teānò*, ကျမ *teāmā* がある。あくまで綴りの変異であり、両者に意味の違いはない。
- <sup>6</sup> MED (1993) の記述は以下のとおり。  
**ငါ** /nga/ *pron* I (generally used when speaking to one's equals or inferiors). (ibid.: 91)  
**နင့်** ၊ /nin/ *pron* you (used when addressing an equal or a younger person in an intimate way or to others in an impolite manner). (ibid.: 233r)  
**မင်း** /min:/ *n* 1 monarch;king; ruler of a state. 2 royalty and aristocracy. 3 high government official. *adj* 4 honorific term suffixed to nouns meaning 'honourable', 'distinguished', 'good', etc (as in လူကြီး ~၊ နတ် ~၊ ဦး ~၊ မောင် ~). *pron* 5 you, pronoun of address used between intimate peers. 6 you, pronoun of address used by a superior in addressing a subordinate. *part* 7 particle suffixed to some adjectives such as အို ၊ ကြောက် ၊ လွန် to denote a sense of being extreme (as in အို ~၊ လွန် ~၊ ကြောက် ~) (ibid.: 350l)
- <sup>7</sup> いずれも総称としては男性形を単独で用いるか、前者のパターンなら男性形-女性形と並べて現すか、後者のパターンなら女性形-男性形と並べて現す。e.g. ဆရာ (ဆရာမ) *sh'āyā (-sh'āyāmā)* 「(総称的に) 先生」、ကျောင်းသူကျောင်းသား *teáunṭù-teáunṭá* 「(総称的に) 学生/生徒/児童」。ただし後者は近年、男性形-女性形の順になることがある。
- <sup>8</sup> 日本語では小学生は児童、中学・高校生は生徒、大学生以上は学生と語彙を区別するが、ビルマ語では全て同じ語彙となる。
- <sup>9</sup> 特に都会の女性は အဒေါ် *āddò* 「叔母さん」と呼ばれることを嫌がる、という。
- <sup>10</sup> 女性が自身のことを ညီမ *nīmā-nāmā* 「妹」と呼ぶことがかなり一般的になってきていることと、နမ *hnāmā* 「(男性にとっての) 妹」の使用が減り、ညီမ *nīmā-nāmā* 「妹」に取って代わられていることは関連しているかも知れない。話者自身を ညီမ *nīmā-nāmā* 「妹」と呼ぶのであれば聴者の性別が女性に決まるはずだが、聴者の性別に関わりなくこの語彙を使用するということは、「誰にとっての」がもやは意味をなさないことになる。これに対し男性が自分自身を「弟」と呼ばない傾向が強い、ということは、ညီမ *ni* 「(男性にとっての) 弟」と မောင် *màun* 「(女性にとっての) 弟」との区別を解消



する動機がないことになる。

<sup>11</sup> ◦ は本来母音記号 ◯ の下に組み合わせられねばならないが、Microsoft Word の不具合で重ならない。

<sup>12</sup> <http://www.sealang.net/library/>

<sup>13</sup> Miss や Mrs. の使用を控え、Ms. とするのは明らかに現代英語の影響である。恐らくこのような用法はミャンマー国内ではなく、イギリスやアメリカにあるビルマ語コミュニティなどでかなり限定的に使われる語彙ではないかと思われる。

<sup>14</sup> 日本語だと「林さん」がご主人の使用人であるという解釈が可能ではある（日常的にあり得る状況とは言い難いが）。しかしビルマ語の「ご主人」အရှင်ဘုရား *?āmyóṅá* は「夫」という意味であるので、やはり矛盾を起こしていると判断せざるを得ない。

## 参考文献

Myanmar Language Commission. 1993. “Myanmar-English Dictionary” Ministry of Education.

岡野賢二. 2007. 『現代ビルマ（ミャンマー）語文法』. 国際語学社.

大野徹. 2000. 『ビルマ（ミャンマー）語辞典』. 大学書林.

Okell, John and Allott, Anna. 2001. “A Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms”, Curzon Press.

Nomoto, Okano, Moeljadi and Sawada. 2018. ‘TUFUS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)’. 言語処理学会第 24 回年次大会発表論文集, pp.436-9.

[[http://anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2018/pdf\\_dir/C3-5.pdf](http://anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2018/pdf_dir/C3-5.pdf)]

Nomoto, Okano, Wittayapanyanon and Nomura. (forthcoming) ‘Interpersonal meaning annotation for Asian language corpora: The case of TUFUS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)’. 言語処理学会第 25 回年次大会発表論文集.

Okell, John. 1969. “A Reference Grammar of Colloquial Burmese”. 2 vols. Oxford University Press.

鈴木聡. 2017. 『ビルマ語における 1 人称の語彙選択—学校及び家族内での事例を中心に—』. 東京外国語大学平成 27 年度卒業論文.